

「高倉の昔ばなし」より

## 一番 天王さまの由来

平成九年一月二十六日  
高倉郷土芸能保存会 芸能部

語

昔家々に神棚を祀り始めた頃、伊勢参りに行った重郎エ門等は、其の帰り路、毎年ダイジゴ様のお符を届けにやってくる、尾張の津島お師の招きで、上方の祭りを、とつくりと見物して帰って来た。

ピ

ニンバクスシ ― ニンバで外から歩踊で入場三人位

三人正面に来る

開幕×ピ

ステージ数人座り

三人ステージへ上り向き直る

キリ

重

「やあみんな居たかい、今けえった。まあ土産ばなしもいろいろなんだがよう、実ア上方でなあ、面しれえ天王様のなあ、まちゆう見て来たア。神様ア担いてなあ、テエコを叩エてよ村中うもんでよ。そりやアなかなか面白エもんだったなあ。どうだいおらあ方でもやってんべえじゃあねえか」

「うーんやってんべえ、やってんべえ」

「じゃあ支度だ、支度だ」

皆

皆

ピ

ニンバ ご幣、太鼓を丸太に付ける  
皆担いたら シチャウメ 会場を一周してステージに上る  
皆腰を下しぶつちやける 一人はご幣を外し前へ捨てる

×ピ

皆

「ああ面白かった、くたびれた、くたびれた」

閉幕

語

こうして祭が終り神に見たてた、桧の枝葉を高倉小学校裏の、西の沢の谷へ投げ捨ててしまった。すると其のたたりか、皆はひどい熱病におかされてしまった。数日後、重郎エ門の夢枕に八束の髭をはやした大きな男神が現れた

ピ

ヤタイ

男神外から歩踊で入場中央迄来る。

ステージの上の皆「うーんうーん」とうなって寝てる。

男神はステージへ上り中央で前へ向き構える

開幕×ピ

男神

「われは天王神だが、祭りをしてくれて嬉しかった。しかしその後ハケの下へ投げ捨てられ、とても苦しんで居る、すまないが拾いあげて何処か高い所へ祀ってもらいたい」

ピ

カマクラ 男神楽屋へ引込む

語

ハツと我に返った重郎エ門、この事を皆に告げた。皆苦しいなかを立上り、谷から神を拾いあげた。そしてハセミ山の東へ祠を立てて熱病退散を祈った。すると不思議、たちどころに全快して皆元気を取り戻した。

カンカンノーに変わる

一列に並びカンカンノーを二度合わせ踊って終る。

閉幕

祇園太鼓の用意

語

そして其の祠を祀った天王山の八坂神社は、明治の初め、氷川神社へ合社され、以来当社から村廻りをするようになり、その賑わいは、高倉天王黒須マチと謡われ、夏病み除、あらたかと、広く信仰を集めた。

尚、市、無形文化財高倉祇園太鼓は其の大太鼓の銘文に文化十二年と今から一八二年も昔、既に張替えられ、創作は、江戸城御用太鼓師藤本伊兵エと記され当地の誇りとする名太鼓で大切に思います。では、高倉祇園太鼓をお楽しみください。

ピ

開幕

ナガシノ一回シチヨウメ

終了礼で閉幕